

# 『紫式部日記』における「真名書きちらし」考

——清少納言批評を中心に——

張 培 華

## 要 旨

清少納言は紫式部について何の言及も残していない。ところが紫式部は先輩の清少納言について厳しい批評を残している。それは周知のように「真名書きちらし」である。いったい「真名書きちらし」はどのような意味なのか。この点について、従来の研究では多様な角度から優れた解釈があるが、書道的な側面からの分析はまだない。そこで本稿では残存する紫式部の書写切れや、清少納言と中宮定子の『白氏文集』を巡るやりとり、及び能書家として知られる藤原行成との交際などを見る。と、清少納言が書き写した詩句が不体裁であるというのが、紫式部のあの言葉の意味ではないかと考察したものである。



## 一 せいめい

紫式部は自らの日記の中で、清少納言について、次のように批判している。本文は新編日本古典文学全集による。

清少納言こそ、したり顔にいみじうはべりける人。さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべるほど、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり。かく、人にことならむと思ひこのめる人は、かならず見劣りし、行末うたてのみはべれば、艶になりぬる人は、いとすごうすずるなるをりも、ものあはれにすすみ、をかきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじくあだなるさまにもなるにはべるべし。そのあだになりぬる人の<sup>ゆくすゑ</sup>はて、いかでかはよくはべらむ。

(二〇二頁)

注目したいことは、傍線をつけた「真名書きちらし」という表現である。この「真名書きちらし」について、従来の解釈は、二つの意味に揺れている。一つは、筆にまかせて無造作に漢字をどんどん書く。もう一つは、あちらこちら漢字を書く、である。本稿の論点は、「真名書きちらし」の意味は、後者ではなく、前者、書かれた漢字があまり綺麗ではないことを意味するのではないかと示すことにある。特に字が上手い人の目から見ると、初心者<sup>しんしゆ</sup>の字は、習字のレベルにも劣るように見える。ゆえに紫式部は「上手」の視点から清少納言の字を眺め、批評したのではなからうか。しかし、清少納言が書いて残したものは、『枕草子』と『清少納言集』にしか見えない。清少納言が書いた漢字とはどのようなものなのか。また紫式部の字はいかがであったのだろうか。これらの疑問を踏まえて、紫式部が清少納言を批判した「真名書きちらし」の真相を考証してみたい。

## 二 先行「真名書きちらし」の解釈

周知の如く、「真名書きちらし」の「真名」は、「仮名」に対する漢字であることは間違いないだろう。問題は、「書きちらす」の意味について、どのように解釈するのかわかることである。

まず『日本国語大辞典』第二版、第三卷（小学館 二〇〇一）では、「書きちらす」を、次のように説明している。

かき・ちら・す 【書散】

解説・用例

〔他サ五（四）〕

筆にまかせて無造作に書く。また、あちらこちらに書きしるす。

（三九二頁）

右のように、『日本国語大辞典』では、二つの意味で解釈している。すなわち①「筆にまかせて無造作に書く」、②「あちらこちらに書きしるす」である。しかし、『角川古語大辞典』初版（角川書店〈初版〉一九八二）に、②の解釈は見えない。

かきちら・す 【書散】動サ四 筆に任せて、むやみに書く。筆に任せて無造作に書く。

（七〇六頁）

右のように、両辞典では、「書きちらす」の解釈は統一されていないことが分かる。しかし他の辞書の解釈は、『角川古語大辞典』と同じように、「筆にまかせ無造作に書く」という意味で一致している。例えば、以下の通りである。

① 『新編大言海』（富山房 〈初版一九五六〉一九九〇）

かきちら・す ス・セ・サ・シ・セ  
さ・し・す・せ・せ （他動、四）**書散** 筆二任セテ、ムヤミニ書ク。

（三九二頁）

② 『日本大辞典 言泉』（日本図書センター 〈初版〉一九八二）

かきちらす 書散す【動四他】順序も位置も正さずに書く。

（六八三頁）

③ 『修訂大日本国語辞典』新装版（富山房 〈初版一九一五〉一九七二）

かきちらす 書散（他動四）筆に任せて書く。順序を正さず書く。

（三三三頁）

つまり「ムヤミニ」、「順序も位置も正さず」に書くということである。しかし『日本国語大辞典』以後は、それと同じように、「あちらこちらに書く」という意味も書かれている。

例えば、次のような解釈が見える。

ア 『学研 国語大辞典』（学習研究社 一九八八）

かきちらす【書き散らす】《他五》①「文章などを推敲せず」筆にまかせて書く。無造作にどんどん書く。（中略）②「あちこちに書く」。

（三〇九頁）

イ 『大辞林』第三版（三省堂 二〇〇六）

かきちら・す【書（き）散らす】（動サ五）「四」筆にまかせて書く。あちこちに書く。

ウ 『岩波 国語辞典』第七版（岩波書店 二〇一）

（四三五頁）

かきちらす【書（き）散らす】『五』①筆にまかせて、むぞうさにかく。②あちこちに、やたらに書きつける（ちなみに、岩波書店補訂版『古語辞典』（二〇〇九）には、「書きちらす」は見当たらない）。

（二三〇頁）

以上のことから、辞書の「書きちらす」の解釈は、まず「筆に任せてむぞうさに書く」と解釈され、続いてそれに「あちらこちらに書く」という意味も加わったことが明らかである。では、『紫式部日記』の「真名書きちらし」に対する解釈はいかがであろう。この点について、代表的な注釈を取り上げて確かめてみたい。論述の便宜を図るため、冒頭文のアルファベットは稿者が付けた。

A 木村正三郎『評釈紫女手簡』（三協合資会社 一八九九）（引用文の表記は現代語に統一、ルビを略した）

真名かきちらしは、漢字を書きたること。

（五二頁）

B 前田惟義『紫式部日記古注集成』（桜楓社 一九九一）

あれほど利口そうにふるまって、漢字を書き散らしていますが、その力量の程度も、よく見ると、まだひどく未熟な点が沢山あります。

（七〇三頁）

C 萩谷朴『紫式部日記全注釈』下巻（角川書店 一九七四）

あれだけ利巧ぶって、漢字を書き散らしていますところも、よく見たら、まだまだ未熟な点がたくさんある。

D 伊藤博 『紫式部日記』新日本古典文学大系（岩波書店 一九八九）

（二三八頁）

あれほど利口ぶって、漢字を書き散らしておりますが、その程度はよくよく見れば、まだまだ不足な点がたくさんあります。

（三〇九頁）

E 中野幸一 『紫式部日記』新編日本古典文学全集（小学館 一九九四）

あれほど利口ぶって漢字を書きちらしております程度も、よく見ればまだひどくたりない点がたくさんあります。

（二〇二頁）

F 小谷野純一 『紫式部日記』（笠間書院 二〇〇七）

清少納言は（いやはや）、手がつけられないほどに得意顔でいた人。あんなに利口ぶって、漢字を書き散らしているのも、よく見ると、まだまだ足りないところが多いのです。

（二五五頁）

右のすべてが一致している点は、紫式部が清少納言を批判したポイントは、清少納言が漢字を書いたということである。しかもよく見ると、清少納言が書いた漢字はまだまだ不足が多い。要するに、紫式部が見た清少納言の漢字は頗る悪い、ということである。だが、これらの解釈では、具体的にどのような漢字を指すのか触れていない。つまり、これらの解釈は、そもそも「書きちらす」の「筆にまかせて書く」という原義による解釈である。書かれた漢字をよく見ると、書道家の目で鑑賞すればするほど、問題が出てくるだろう。だからこそ、紫式部は、清少納言が書いた漢字は、まだまだ不足のところが多いと言ったのであろう。紫式部の原文の文脈から見ると、これらの解釈は正確であ

ると言えるだろう。だが、いったい清少納言が書いた漢字のどのような部分を指すのか。この問題を考察する前に、先行研究にある、もう一つの「真名書きちらし」の解釈と論説を踏まえなければならない。

### 三 先行「真名書きちらし」と「漢学の才をひけらかす」の変容

まず注意しなければならないことは、「真名書きちらし」が「漢学の才をひけらかす」に変容した時点である。例えば、次のような注釈が代表的な説と言える。

G 池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔『枕草子 紫式部日記』日本古典文学大系（岩波書店〈初版一九五八〉一九七二）  
漢学の才をひけらかすことをいう。  
(四九六頁)

H 宮崎莊平『紫式部日記』下巻（講談社学術文庫 二〇〇二）  
真名書き散らして「真名」は、仮名に対して漢字のこと。「真字」とも表記する。それを書き散らすとは、『枕草子』において漢詩文の知識を度々ひけらかしていることをいうのかも知れない。  
(二二〇～二二二頁)

右Gでは、「真字」<sup>(1)</sup>を書き散らすことを、「漢学の才をひけらかすことをいう」と注釈している。Hの解釈はGと類似しており、『枕草子』の中の漢詩文の知識を度々ひけらかすと指摘している。注釈だけでなく、現代語訳や論説も、「真名書きちらし」を「漢字を書く」ではなく、「学才」や「学識」と捉えている。例えば、森三千代は、次のように現代語訳している。



清少納言という女房は、高慢ちきな顔をした、実に大へんな女だ。さもさも賢女ぶって、学才を鼻の先にぶらさげているが、よく見ていると、まだまだ勉強の足りない点がたくさんある。<sup>(2)</sup>

傍線を付けたように、「真名書きちらし」は、清少納言が「学才を鼻の先にぶらさげている」と捉えている。このような意識は、近年の現代語訳にも見られる。例えば、山本淳子である。

清少納言ときたら、得意顔でとんでもない人だったようでごさいますね。あそこまで利巧ぶって漢字を書き散らしていただけますけれど、その学識の程度も、よく見ればまだまだ足りない点だらけです。<sup>(3)</sup>

山本は「漢字を書き散らし」をそのまま使用しているが、よく見れば、やはり「学識」のところに広がっている。また山本は、他にも「真名書き散らし」ということ（『国語国文』第六十三巻第五号、一九九四）という論文をものしており、さらに『紫式部日記』清少納言批評の背景」と題した論を『古代文化』（二〇〇一）に発表、加えて「一条朝における漢詩文素養に関する社会規範と紫式部」という題で、『人間文化研究』（京都学園大学 二〇一六年三月）に論を掲載しているが、これら一連の清少納言に対する紫式部の批評は、同年に出版された氏の著作『紫式部日記と王朝貴族社会』（和泉書院 二〇一六）に収録されている。まとめると、氏の観点は、ほぼ次のようになろう。引用文の傍線は稿者が付けたものである。

これが紫式部の清少納言批判の言であることは明らかとして、その論拠として紫式部は、漢字との関わり方に関するある種の価値観を適用しているようである。その価値観とはどんなものか。同時代の社会通念と比べてどうだったのか。またその価値観をここに提示することにはどんな意味があったのか。

平安中期の女性と漢字、或いは漢詩文との関係については、従来二つの常識が通行してきた。一つは公的な漢字使用の場を持たない女性にとって「漢才つまり学問は必ずしも必要でない」ものであったということであり、

もう一つは清少納言や紫式部といった特定の個人は秀逸な漢才を備えていたということである。そして二つの間の齟齬を解決する形で、前者は一般論、後者は彼女たちが漢学の家に生まれたという個別的事実によるものとの説明が加えられている。

つまり山本は、池田龜鑑の「漢学の才をひけらかす」という視点を踏まえ、具体的な「個別的事実」を追究する論点と思われる。例えば、氏は「真名書きちらし」の範囲を、次のように解釈している。

清少納言を評した「真名書き散らし」は、単に漢字使用の頻度の高いことを言ったものではなさそうである。また、氏は次のようにも述べている。

つまりここで紫式部がなしているのは、「漢字使用」そのものというよりは、それを他者との関係の中において場合のことなのである。「さかしだつ」は才能の質に関わる語ではなく、才能を他者にひけらかす行為を言う。さらに氏は次のように言葉を続けている。

一条朝は、漢詩文を私的なものとする点、社会全体が歴史上一種異端の様相を帯びたものだった。時代を経れば紫式部のほうが正統となり、清少納言たちの「ひけらかし」は同時代には受けなかつた非難を負うことになった。その中で「真名書き散らし」という言葉はどんな役割を演じたか。一人清少納言だけではない、他の多くの後進女性の活動の場を狭める方向に働いたのではないか。紫式部が日本文学と漢詩文との結実の一つの頂点となる作品を書いたことは確かである。しかし「真名書き散らし」のもたらしたものを考えるとき、彼女の、いわば功罪とも言うべきものを思わないではいられない。とはいえ本章は紫式部への批判を目指すものではない。何よりまず、この言葉を吐かずにいられなかつた紫式部の事情と、その背景にあつた文化的事情をこそ重要と考える。<sup>(4)</sup>また村井幹子は、当時の女性として、真名を読む、真名を書くことが、決して悪いことではなく、紫式部がそれを

否定したのではなかったと次のように述べている。

「女の真名読み・真名書き」そのものを否定しているのではないのである。それ故、作者が清少納言批評において女の「真名書き散らすこと」を取り立てて述べたのもそのためであつたと思われ、ここにおいて清少納言批評はまさしく、作者がみやびを担う後宮女房としての自己の現実を語るための布石となつていたのであり、極めて重要なものであつたといえる。<sup>(5)</sup>

これらの背景を掘り出す考察は興味深いが、根本の「真名書きちらし」の問題から遊離してはいないだろうか。まずは「真名書きちらし」の書きちらした漢字とはどういうものなのか。つまり「真名書きちらし」は、必ずしも「あちらこちらに書く」という意味だけではなく、他の解釈もできるのではないだろうか。すなわち、「真名書きちらし」の「書きちらす」は、『徒然草』にも見える「書きちらす」と同じ意味ではないだろうか。本文は、新編日本古典文学全集による。傍線は稿者が付けたものである。

### 第三五段

手のわるき人の、はばかりならずか文書きちらすはよし。みぐるしとて、人に書かするはうるさし。

（二〇九頁）

つまり、紫式部が清少納言を批判した「真名書きちらし」の意味は、女性として清少納言が真名の漢字をたくさん書いているが、それらをよく見ると、まだまだ字が下手だという意味なのではないだろうか。解決すべき問題は、紫式部は、なぜ「よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」と批判しているのかである。その理由と原因を説明しなけ

ればならない。また清少納言が、いったいどのような「真名」を書いたのか。その点も究明しないと正しい解釈はできないと思う。

#### 四 「真名書きちらし」と紫式部「書」の見る目

なぜ紫式部は、清少納言の「真名書きちらし」に対して、「よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」と強調したのか。このセリフは、紫式部はまさしく書道家のような目で、清少納言の「書」を鑑賞した評価と考える。この点については、当時の男性貴族の間に書が流行っていた背景を確認してみたい。例えば、春名好思は、かつて平安中期の藤原時代における書について、次のように述べている。

藤原時代の貴族階級に属した人は、文書・記録・詩文・和歌を書くために書が必要であり、また、写本・写経をするにも必要であった。すなわち、書は日常生活に欠くことのできないものであった。それ故、書を巧妙に書くことに努め、能書がたくさん輩出して、書がさかんであった。当時は能書としてすぐれた人を手書きとい<sup>(6)</sup>った。当時の男性貴族の藤原行成『権記』にも、日常生活に関わる書の記録は、次のように見える。

正暦四年二月廿八日

……定雑事、予後方人也、後方定雑事、余執筆書雑事……

正暦五年八月廿八日

……宣命清書之後又參、如先令奏、返給之後復座……

長徳元年九月廿八日

……先右大臣参御所、召紙・筆、有除目之事、子四剋事了、大臣退下、清書之後相副直物奏之……

長徳元年十月七日

……早朝有召、参右府御宿所、下給可奏書等目錄……

長徳三年七月五日

……問内記、無殊難者、可□清書、即仰大納言……

長徳三年七月十七日

……早朝藤進士以書伝左丞相命云……

長徳三年七月三十日

……依例宣旨書、即加署了、示蔵人少納言……

長徳三年八月廿八日

……字大間書落、被仰召名上卿令付……

長徳三年十月廿一日

……仰云、依案、清書又令奏、返給……<sup>(7)</sup>

右のように、藤原行成は宮廷の中で、時々書をする事が分かる。天皇から命を受けてすることは当然であるが、ある時には、自らの雑なことも書する。また藤原実資『小右記』でも書について頻繁に記している。例えば、長保元年と二年に関する書の記録は次のように見える。

長保一年一月七日

……臨時曲宴有如此例、予云、被書加下名可宜歟、左府承諾……

長保一年二月九日

……調度立之、以行成卿（藤原）令書屏風色〔紙〕形云々……

長保一年七月一日

……左大臣召見年々造宮定文、大臣執筆、書行事上卿以下……

長保一年九月二二日

……又仰云、可書奉御請文者、令書二通奉之……

長保一年十月三〇日

……有酒食、右大弁行成（藤原）書屏風色紙形、華山法皇、主人相府……

長保一年十二月一日

……女房出御遺令・御筆書一卷……

長保一年十二月四日

……黄昏退出、明日雜事、行事令書出下給官司……<sup>(8)</sup>

藤原行成は当時の能書家で、右に示したように、『小右記』にも書に関わる場面で登場している。また興味深いところが見える。それは長保一年十二月一日の記録から、皇后の御筆や書などは女房が保管していることが分かる。『権記』と同じように、藤原実資も雑なことを書にすることは日常生活の一つであったのである。

『紫式部日記』に従うと、寛弘七年前後くらいが、当該する清少納言を批判した時期と考える。では、この時期、藤原道長は『御堂関白記』の中で、如何に書について記しているのか。この点を確かめてみたい。

寛弘五年十二月廿日

- ……（行成）取筆、而帥（伊周）取筆書題、人々相奇、七八人奉仕間……
  - 寛弘六年十月一日
  - ……補次侍従、定出居侍従、手自書之、出居定文賜中将公信朝臣……
  - 寛弘六年十一月十五日
  - ……有和哥事、侍従中納言（行成）書之……
  - 寛弘六年十二月二日
  - ……権大夫献盃有、令勘解由長官書之……
  - 寛弘六年十二月四日
  - ……太后宮大夫勸盃献寿、侍従中納言書之……
  - 寛弘七年八月廿八日
  - ……侍従中納言（行成）清書、奏聞大間、返給後……
  - 寛弘七年十二月十一日
  - ……今日被加奉御幣宣命並清書、着八省院如常儀……
  - 寛弘八年八月十五日
  - ……雑事、弁令ト悠紀郡・主基郡、手書之、近江国神崎……<sup>(9)</sup>
- 右に示したように、藤原行成の書の内容は、『御堂関白記』にも記されている。藤原道長も自ら「手書之」を度々記録している。また寛弘六年十一月十五日の藤原行成の書写は、漢文ではなく和歌である。これを見ると、男性貴族だけでなく、当時の女性貴族も書を嗜んでいることは事実であろう。例えば、飯島春敬は次にように述べている。

この頃は小大君、佐理の女、紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔等の才媛が多くいた。そして当時の女性は、女手をよく書いたという記録が数多く見られる。現在遺っている平安時代の仮名の名筆には、女性の手になったものが多いと考えなければなるまい。

例えば、伝貫之筆名家集切、伝道風筆小島切、伝行成筆曼殊院本古今集、同桧色紙などは、男性書家の名になっているが、事實は女性の手になったもののようである。また、小大君、紫式部、大式三位などと伝えられているものも、自筆ではないまでも、やはり女性の筆と認めるべきものである。<sup>(10)</sup>

右に指摘されている紫式部の作品と伝えられる古今集について、氏は、次のように詳しく説明している。

伝紫式部筆

きゆうかいぎれ  
久海切

『古今和歌集』を書写した断片である。舶来ものの「から紙」で、もとは粘葉帖と思われる。卷十二、卷十三の断簡、五、六葉しか知らない。遺存するところのまことに少い切である。

安田家蔵の卷十三の巻頭によれば、漢字は勁直であるが、仮名は麗しい。筆は極めて鋒のよくきくものである。他にはこれと同筆のものを知らないが、印象的には亀山切などと共通して細美である。紫式部の筆とする証はなく、一脈女人的書風であることだけは感得できようかと思う。(前書同・三九二頁)

この「久海切」は、かつて尾上八郎も次のように解説している。(引用文の漢字を現代語に直した)  
紫式部の筆として伝へらるゝものに、古今和歌集の断片なる久海切と云うがあり。線條は繊細にして尖锐なれども、香紙切の如く甚だしからず、情趣の自づから津津たるあり。各字の連続も、急迫のところありといへども、大体に於いて、自然にして作爲の跡を見ず。ただ処々萎縮に傾きて、暢達せざるものあるは、伝行成筆の重之集に類せり。或は、それと近似せる書体を有せる人、殊に女流の手に成れるならむか。<sup>(11)</sup>



これらの書道史から見ると、紫式部は強く書の知識を持っていた女性だと考えられる。近年の仮名書道の研究によつて、<sup>(12)</sup>『源氏物語』や『紫式部日記』などの仮名文学には、書に関わる場面は少なくないことが分かる。ここではその一例を挙げてみよう。

『源氏物語』帚木卷（新編日本古典文学全集）

手を書きたるにも、深きことはなくて、ここかしこの、点長に走り書き、そこはかとなく気色ばめるは、うち見るに、かどかどしく気色だちたれど、なほまことの筋をこまやかに書き得たるは、うはべの筆消えて見ゆれど、いま一たびとり並べて見れば、なほ実になむよりける。はかなきことだにかくこそはべれ。まして人の心の、時にあたりて気色ばめらむ見る目の情をば、え頼むまじく思うたまへえてはべる。そのはじめのこと、すきずきしくとも申しはべらむ」とて、

（七〇頁）

また『紫式部日記』の中の、一条天皇のために、プレゼントとして『源氏物語』を書写する場面では、何より作者紫式部の書に関わる紙、硯、筆、墨などの知識が詳しく見られる。（引用文は新編日本古典文学全集による）

入らせたまふべきことも近うなりぬれど、人々はうちつぎつつ心のどかならぬに、御前には、御冊子つくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りとのへて、物語の本どもそへつつ、ところどころにふみ書きくばる。かつは綴ちあつめたむるを役にて、明かし暮らす。「なぞの子もちか、つめたきに、かかるわざはせさせたまふ」と、聞こえたまふものから、よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯をさへ持てまゐりたまへれば、とらせたまへるを、惜しみのしりて、「もののかにて、むかひさぶらひて、かかるわざし出づ」ときいなむ。されど、よきつぎ、墨、筆など、たまはせたり。

局つぼねに、物語の本ほんどもとりにやりて隠しおきたるを、御前おまへにあるほどに、やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍ないしの督かんの殿とのに、奉りたまひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし。

若宮は、御物語などせさせたまふ。うちに、心もとなくおぼしめす、ことわりなりかし。

(一六七〜一六八頁)

注目したいことは、右に書かれた紙、硯、筆、墨の四つの文房具である。この四つの道具は書において頗る大切なものであることは言うまでもない。例えば、藤原行成の日記の中に、次のような記録が残されている。

『権記』長保四年十一月九日

九日 庚子。泰山府君祭、招魂祭、直物

(安倍あべの晴明はるあきら 朝臣あそんに泰山府君たいざんぶくんを祭まつらせた。料物米りょうもつ二石斗と・紙五帖じごち(竹田たけだの)利成としなりの許もとから送おくった。)・鏡一面・硯一面・筆一管かん・墨一延てい・刀一柄えを、家から送おくつた。<sup>(13)</sup>

無論、書道家ごとに、どのような紙、硯、筆、墨を使うのか、こだわりがあるだろう。先ほどの例では、紫式部自身を選んだ紙、硯、筆、墨を使うということから考えて、彼女が、かなり書に関する奥深い知識を持っていることは想像に難しくない。つまり、かつて小松茂美が次に述べた通りである。

りつぱに漢字をこなすことのできる宮廷女性もいるにはいたようであるが、これはほんの限られたインテリにすぎない。<sup>(14)</sup>

だからこそ、紫式部が、清少納言を批判した「真名書きちらしてはべるほども、よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」という真相は、清少納言のあちらこちらに漢字を書くのではなく、書いた漢字がよくなかったと考えられるの

である。確かに、清少納言は真名の漢字を書く自信がなかった。この点については、本人が『枕草子』の中ではつきりと言っている。次の章段を確認してみよう。

第七八段 頭中将のすざるなるそら言を聞きて

いみじくにくみたまふに、いかなる文ふみならむと思へど、ただいまいそぎ見るべきにもあらねば、「いね。いま聞えむ」とて、懐ふとしろに引き入れて、なほなほ人の物言ふ、聞きなどする、すなはち帰り来て、「さらば、そのありつる御文を給はりて来こ」となむ仰せらるる。とくとく」と言ふが、「いをの物語」なりやとて、見れば、青き薄うすやう様に、いと清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省花時錦帳下」と書きて、「末すゑはいかに、末はいかに」とあるを、「いかにかはすべからむ。御前ごぜんおはしまさば、御覽ごらんせさすべきを、これが末を知り顔に、たどたどしき真名書きたらむまないと見苦し」と思ひまはすほどもなく、責めまどはせば、ただその奥に、炭櫃すびつに、消え炭すすみのあるして、「草の庵いほりを誰たれかたづねむ」と書きつけて取らせつれど、また返事かへりごとも言はず。

（二三五～二三六頁）

藤原齊信は長い時間、清少納言と連絡をとっていなかったが、久しぶりに便りを清少納言に送ってきた。しかも『白氏文集』の詩句を使って、上の句のみ書いて、下の句はいかがであろうかと問うている手紙である。清少納言は当然下の句は分かっているが、それを真名で書く自信はない、すなわち右に傍線を付けた文である。

ところで、清少納言が書いた「たどたどしい真名」とはどのようなものなのか。それは、清少納言が練習として、『白氏文集』詩句を書写したものと考えられる。

## 五 清少納言の『白氏文集』詩句書写の可能性

清少納言が書いたものは、『枕草子』と『清少納言集』しか確認できない。しかも和文だけである。しかし、清少納言が漢詩文を写した可能性はある。なぜなら、それは『枕草子』の中に存在しているからである。まずは書写に関する描写、それから男性貴族との交際、特に一流の能書家である藤原行成の便り、さらに中宮定子との『白氏文集』詩句のやり取りの記事である。

書写に関わる描写は、『枕草子』の中に少なくない。前節に述べた如く、書写に関する重要な道具は、紙、硯、筆、墨である。これらの四つの道具について、四種の『枕草子』本文には如何に存在しているのか、この点を確認するためには、田中重太郎編著『校本枕草子』総索引、第Ⅱ部（古典文庫 一九七四）と松村博司監修『枕草子総索引』（右文書院 一九六八）を合わせて、次のようにまとめてみた。松村博司監修した数字が異なる部分は（一）（二）に示した。

四種本	紙	硯	筆	墨
三卷本	二九（三一）	七（九）	六	一〇（一一）
能因本	三〇	一一	五	一〇
前田家本	二七	一一	九	一四
堺本	一四	九	六	一二

留意したいことは、写本の中で最も古い前田家本の本文には、「筆」と「墨」は、他の三系統本文より一番多くあるということである。これは興味深いところで、今後の究明に譲りたいが、これらの書に関わる道具についての描写は

如何になされているのか。この点について、三巻本から、Ⅰ紙、Ⅱ硯、Ⅲ筆、Ⅳ墨の三つの代表的な章段を取り上げて確認してみたい。

Ⅰ紙

第二二段 清涼殿の丑寅の隅の

白き色紙押したたみて、「これにただいまおぼえむ古きこと一つづ書け」と仰せらるる。

（五一頁）

第二九段 心ゆくもの

白く清げなるみちのくに紙、いといと細うかくべくはあらぬ筆して、文書きたる。

（七一頁）

第二二三段 三条の宮におはしますころ

この紙の端を引き破らせたまひて書かせたまへる、いとめでたし。

（三五八頁）

Ⅱ硯

第二六段 にくきもの

硯に髪の毛の入りて磨られたる。また、墨の中に、石のきしきしときしみ鳴りたる。

（六四〜六五頁）

第七三段 うちの局

清げなる硯引き寄せて、文書き、もしは鏡乞ひて、見なほしなどしたるは、すべてをかし。

第一八二段 好き好きしくて人かず見る人の

(二二九頁)

好き好きしくて人かず見る人の、夜はいづくにかありつらむ、暁あかつきに帰かへりて、やがて起きたる、ねぶたげなるけしきなれど、硯すずり取り寄せて、墨すみこまやかに押し磨すりて、事なしびに、筆にまかせてなどはあらず、心とどめて書くまひろげ姿もをかしう見ゆ。

(三一九〜三二〇頁)

### III 筆

第二九段 心ゆくもの

いといと細ほそう書くべくはあらぬ筆して、文書きたる。

(七一頁)

第九七段 御方々、君達、上人など、御前に

筆ふで、紙など給はせたらば、「九品蓮台くほんれんたいの間あひだには、下品げほんといふとも」など、書きてまゐらせたらば、

(二九五頁)

第二五九段 御前にて人々とも、また物仰せらるるついでなどに

ただの紙のいと白う清げなるに、よき筆、白き色紙しきし、みちのくに紙がみなど得えつれば、こよなうなぐさみて、

(三九一頁)

IV 墨

第二二段 清涼殿の丑寅の隅の

陪膳はいぜんつかうまつる人の、をのこどもなど召すほどもなくわたらせたまひぬ。「御硯すずりの墨すみすれ」と仰せらるるに、目はそらにて、ただおはしますをのみ見たてまつれば、ほとどつぎめもはなちつべし。

（五一頁）

第七二段 ありがたきもの

物語、集しふなど書き写すに本すみに墨すみつけぬ。

（二二七頁）

第二二段 大きにてよきもの

大きにてよきもの 家ゑ。餌袋ゑかぶくろ。法師ほふし。くだ物もの。牛うし。松の木まつぎ。硯すずりの墨すみ。

（三五二頁）

右の描写から分かるように、実に紙、硯、筆、墨は、清少納言の日常生活の中で不可欠なものである。彼女は白い紙が好き、大きな硯の墨は良い、髪の毛や石が硯と墨の中に入るのは嫌、また男性に対しても、目が覚めて、暁に文を書く際に、なるべく真剣に書く姿は素晴らしいと賛美している。また異本には、次のような本文も見える。

一本

一二 薄様、色紙は

薄様うすやう、色紙しきしは 白しろき。紫むらさき。赤あかき。刈安染かりやすぞめ。青あおきもよし。

一三 硯の箱

硯すずりの箱は 重かさねの時まき絵ゑに雲鳥くもとりの紋もん

一四 筆ふでは

筆ふでは 冬毛ふゆげ。使つかふもみめもよし。兔うの毛け。

一五 墨すみは

墨すみは まろなる

(四五六〜四五七頁)

右に揃った紙、硯、筆、墨の文は、短くても、具体的な紙の色、硯の箱のデザイン、筆の毛及び墨の種類などの作者の愛好をはつきりと伝えている。これらの書用の備品が完全に揃っていることから、清少納言が和文と漢詩文を写すことは十分可能であろう。ここで強調したいことは、前掲したIV墨の第七二段「ありがたきもの」を、ゴシック体で示した「物語、集など書き写すに本に墨つけぬ。」という表現である。

すなわち、書き写した内容は和文である物語と歌集だけでなく、漢文の詩句も書き写した可能性があるということである。そのように考えられる理由は、二人の影響である。一人は、中宮定子であり、もう一人は当時の能書家の藤原成である。

まず中宮定子と清少納言の間の漢詩句の遣り取りの場面を見てみよう。周知の如く、第二八〇段「雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子まありて」には、御簾を下ろして、炭櫃に火を起こして物語をしているところ、中宮定子が「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ」(四三三頁)とおっしゃって、すぐ清少納言らは、御簾を上げたという場面である。なぜ清少納言はそれをできたのか。それは中宮定子に言われた『白氏文集』卷第十六律詩「重題」の四首のうち、第三首の「香爐峰雪撥簾看」の詩句からの連想である。要するに、中宮定子は前半の「香爐峰雪」を使って清少



納言に聞いたところ、清少納言は後半の「撥簾看」の意味から簾を上げたのである。もし清少納言が中宮定子の言われた詩句が分からない場合、当然このような迅速な反応はできないだろうということから考えてみると、中宮定子の影響から、清少納言が必死で『白氏文集』詩句を自習していたと考えられる。そのうち書き写すことも必須な訓練であらう。

次に、能書家の藤原行成の影響があることについて述べたい。

前述したように、藤原行成は当時の有名な能書家である。本人が書いた『権記』にもあるように、一条天皇の時代にはものを書写する際、多くの場合、藤原行成が登場している。ここで注意したいことは、藤原行成が書写した『白氏文集』の詩句ということである。例えば、藤原行成が書いた『白氏文集』の詩句は、次のように残されている。

#### 白氏文集切

もとは卷子とおぼしく縦二七・三糶の白紙（鳥の子）を用い、すべて断簡になっている。文字の大きさは、一字一・二糶位の小字である。定文案より気合いがは入り潤達に書写している。文集卷二十六の断簡、白鶴美術館に七行、田中家に三行、東京国立博物館に五行が世に知られている。外に予楽院が三葉ほど模写したものが近衛家に遺っている。行成の書として信ずべきものと思われる。<sup>15)</sup>

当時大流行していた『白氏文集』の詩句を書写した有名な能書家である藤原行成と、清少納言と中宮定子との関係は親しい。なぜなら藤原行成が清少納言に手紙を送ったことが、『枕草子』の中に記されているからである。

#### 第一二七段 二月、官の司に

二月、官の司に、定考といふ事なる、何事にかあらむ。孔子などかけたてまつりてする事なるべし。聡明とて、うへにも宮にもあやしき物のかたなど、土器に盛りてまゐらす。

頭弁とうべんの御もとより、主殿司とのちうかさ、ゑなどやうなる物を、白しろき色紙しきしに包みて、梅うめの花のいみじう咲きたるにつけて持もて来たり。ゑにやあらむと、いそぎ取り入れて見れば、餅餠へいだんといふ物を、二つならべて包みたるなりけり。添そへへたる立たて文ぶみには、解文げもんのやうにて、

進上

餅餠一包へいだんひとつづみ

例に依て進上如件くだんのごとし

別当べたう 少納言殿

とて、月日書きて、「みまなのなりゆき」とて、奥に「この男をとこはみづからまゐらむとするを、昼はかたちわるしとてまゐらぬなめり」と、いみじうをかしげに書いたまへり。御前ぜんにまゐりて御覽ごらんせきすれば、「めでたくも書きたるかな。をかしくしたり」などほめさせたまひて、解文げもんは取とらせたまひつ。(後略)

(二三八〜二三九頁)

さすがは書道家の藤原行成の筆跡であつたところだろう。仮名より漢字を多く書いてあり、男性貴族の氣質が見える。清少納言は嬉しくて中宮定子に見てもらい、「めでたく」「をかし」と賛美している。これを見ると、清少納言は能書家の藤原行成の綺麗な漢字を模倣して、『白氏文集』の詩句を写した可能性を考えることは矛盾しないだろう。

しかし残念ながら、いくら練習しても、清少納言が写したものは本人が言つたとおり、「ただただしい真名」ばかりである。紫式部はそれを見て、「よく見れば、まだいとたらぬこと多かり」と批判したのではないだろうか。

ここで留意したいことは、紫式部は清少納言の「真名書きちらし」という弱点を指摘するに止まらず、清少納言の

人生の行方まで手厳しく批判したことである。その裏には、能書家の藤原行成と清少納言の親しい関係に羨ましくて憎らしいと思つた可能性があるということである。

『枕草子』には藤原行成が登場した章段が五つある。ところが『紫式部日記』には藤原行成が登場したところは二箇所、しかもいずれも公的場面で、つまり行成はいかなければならない場面なのである。前掲したような清少納言と藤原行成の親しく個人的な交際は、紫式部にはなかつたのである。

## 六 おわりに

以上、『紫式部日記』における「真名書きちらし」という表現に注目し、清少納言批評を中心として考察してきた。まず「真名書きちらし」の「書きちらす」の原義を考察し、『角川古語大辞典』の、「筆にまかせてかく」という意味を採用した。紫式部は、自ら書の審美眼から、清少納言の書いた真名を批判したと考えた。書道史における研究の成果から見ると、当時の書は男性貴族だけでなく、女性の書も存在している。特に紫式部の書と伝えられている『古今集』資料が残されている。つまり、紫式部は書に関する深い知識を持っている女性と言える。それは『源氏物語』と『紫式部日記』における書の評価と書に関する道具、例えば、紙、硯、筆、墨などの描写によって証明されている。また清少納言の『枕草子』における書の描写、書の道具でも極めて多くの章段に書かれている。清少納言が書写する条件が十分揃っていることは確実である。また、中宮定子と清少納言の、『白氏文集』に関したやり取りの場面を確認し、さらに名書家である藤原行成と清少納言の親しい交際から見ると、清少納言は藤原行成の綺麗な漢字を模倣して、練習のために、『白氏文集』の詩句を写した可能性を考察した。最後に、紫式部は、清少納言を批判した原因と考えら

れることとして、名書家の藤原行成と清少納言の親密な交際に対する嫉妬を考えてみた。

【注】

- (1) 池田亀鑑・岸上慎二・秋山虔『枕草子 紫式部日記』日本古典文学大系（岩波書店 一九七二）、頭注：「真字は漢字。仮字（かな）に対して。」四九六頁。
- (2) 森三千代訳「紫式部日記」『王朝日記集』古典日本文学（筑摩書房 一九七七）一三三六頁。
- (3) 山本淳子『紫式部日記』現代語訳付き（株式会社KADOKAWA 二〇一五）電子版No.4460/5935°
- (4) 山本淳子『紫式部日記と王朝貴族社会』（和泉書院 二〇一六）二四三～二六三頁。
- (5) 村井幹子『紫式部日記の作品世界と表現』（武蔵野書院 二〇一四）一五六頁。
- (6) 春名好重『平安時代書道史』（思文閣出版 一九九三）八四頁。
- (7) 渡辺直彦校訂『史料纂集 権記』第一（統群書類従完成 一九九六）。
- (8) 『増補 史料大成 小右記』一、二、三（臨川書店 一九九七）。
- (9) 東京大学史料編纂所編纂『大日本古記録 御堂關白記』上、中、下（岩波書店 一九七七）。
- (10) 『飯島春敬全集』第五卷（三陽社 一九八六）八頁。
- (11) 尾上八郎『平安朝時代の草假名の研究』（雄山閣 一九四二）八〇頁。
- (12) 主な論文は次の通りである。①藤田菖畔「紫式部書道観：『源氏物語』におけるかな文字」『金沢大学語学・文学研究』一九八六。②植田恭代「『源氏物語』からみる跡見女学校の教育：明治・大正期を中心に」『跡見学園女子大学文学部紀要』二〇〇四。③杉浦妙子「『源氏物語』に見る紫式部の書美について」『書学書道史研究』

- 二〇〇七。④南條佳代（一）「平安文学におけるかな書道」『源氏物語』にみられる書道観と時代性』『佛教大学大学院紀要・文学研究科篇』二〇一一。（二）南條佳代「平安文学におけるかな書道」『枕草子』にみられる書道観と時代性』『佛教大学大学院紀要・文学研究科篇』二〇一二。（三）「平安文学におけるかな書道」『紫式部日記』にみる書道観』『仏教大学総合研究所紀要』二〇一三。
- （13）倉本一宏 全現代語訳 藤原行成『権記』中（講談社 二〇一二）二四九頁。
- （14）小松茂美『日本書流全史』（講談社 一九九九）七一五頁。
- （15）『日本書道大系』3 平安（二）（講談社 一九七二）一一四頁。

Discussion on *mana kakichirashi* in the *Murasaki Shikibu's Diary*: A Close Look at the Critique on Sei Shōnagon

ZHANG, PEIHUA

The well-known phrases of *mana kakichirashi* in the *Murasaki Shikibu's Diary* have been interpreted as a severe criticism made by Murasaki Shikibu toward Sei Shōnagon. There are no records left indicating that Sei Shōnagon did something that could have triggered Murasaki Shikibu to justify such a criticism, though, Murasaki Shikibu criticized Sei Shōnagon, despite the fact that she was younger than her, without hesitation. Regarding the meaning of *mana kakichirashi*, excellent interpretations from various angles have been discussed in the conventional research. However, there is no concrete studies nor findings on her criticism which suggests her calligraphy view. Therefore, in this article, we put aside the "writing kanji here and there" and discussed a possible interpretation from a new angle that Murasaki Shikibu pointed out that the handwriting transcribed by Sei Shōnagon were not good. We examined the fragment of copies, called *shosha gire*, of Murasaki Shikibu known in the history of Japanese Calligraphy, the exchanges with empress Teishi through the "*Baishi wenji*," and the close friendship with the calligrapher Fujiwara Yukinari.